

〈研究ノート〉

## 親子のひろば「ぽっけ」における学生と親の育ち

—こども学部学生の保育参加の意義—

○菅野 陽子<sup>1)</sup>      ○五十嵐裕子<sup>2)</sup>      ○丸谷 充子<sup>3)</sup>  
 大久保秀子<sup>4)</sup>      船木 美佳<sup>5)</sup>      柴田 崇浩<sup>6)</sup>

### 要旨

浦和大学こども学部内にある親子のひろば「ぽっけ」(以下「ぽっけ」と記す)を通じた学生教育への取り組みは2013年4月で7年目を迎えた。すでに「こども理解と観察」の授業や「ぽっけ」への自由参加、インターシップの実施などの継続的な積み上げがある。さらには、Nobody's Perfect (以下NP) 講座や「My Own Time-おにいさんとおねえさんと遊べるタイム-」において保育体験を提供することが学生の学びにとって有効であり、親子にとってもともに成長する機会となっていることが先行研究にて明らかになった。

今回はこれらの実績を踏まえて、「ぽっけ」での取り組みの教育的意義の検討を深める。そのために他大学の学内広場の活用を調査し、そのうち2つの大学の学内施設訪問と運営担当教員へのインタビューを行ったが、本研究は主にそれらの報告をもとに、「ぽっけ」の活動を通じて、子どもの成長とともに学生と親の育ちをどのように期待できるかを論じる。

キーワード 大学学内にある親子のひろば、学生教育、学生と親の育ち

### 目次

はじめに

1. 「ぽっけ」の課題再考
    1. 1 「ぽっけ」と学部教育理念
    1. 2 「地域モデル」としての役割
    1. 3 「子育て臨床」を学ぶ開かれた教室
  2. 2013年度特定研による調査研究の報告
    2. 1 他大学の子育て支援センター
    2. 2 相模女子大学子育て支援センター
    2. 3 東京都市大学子育て支援センター「びっぴ」
    2. 4 外部講師による研究会
  3. 学部教育における「ぽっけ」のコンセプト・マップ
    3. 1 特色ある教育としての期待
    3. 2 カナダの大学教育からの学び
      - (1) ライアソン大学
      - (2) カナダのED (エデュケーショナル・ディベロプメント) の示唆するもの
    3. 3 今後の「ぽっけ」における学生教育実践の試みと課題
- おわりに

---

1) 浦和大学 こども学部      3) 浦和大学 こども学部      5) 浦和大学 こども学部  
 2) 浦和大学 こども学部      4) 浦和大学 こども学部      6) 浦和大学 こども学部

## はじめに

2007年10月より定期的開設されてきた親子のひろば「ぼっけ」は現在8年目に入るが、本研究の契機となったのは7年目を迎えた時期のことである。「こどもコミュニティ運営委員会」の席上、執筆者（委員メンバー）の間で「なぜ今『ぼっけ』での学生の保育参加なのか」という討議をしていた際に、本学の特定研に応募し大学内にある親子のひろば「ぼっけ」（以下「ぼっけ」）の教育的意義の研究を広げることとした。その結果採用されたため、他大学の調査研究を中心に、「ぼっけ」における学生教育を改めて学生と親の育ちの観点から検討を行った。

### 1. 「ぼっけ」の課題再考

そもそも「広場」とは広辞苑<sup>[1]</sup>でみると「うちひらけた場所。ひろっぱ。」とある。しかしながら、子育て支援活動の場を「(子育て)ひろば」と呼んだ趣旨は、恐らくは古代ギリシアの「広場」(＝アゴラ、アゴレイ)の意味するところの多くの人が集い、その場所を中心に物、情報、技術などが提供されたり交換されたりする概念から由来すると思われる。しかし櫃田(2008)<sup>[2]</sup>は、そういった機能を担う従来のひろばではなく、「親子が日常的に利用できるような生活圏のなかにある常設の場で、自発的に参加して親も子も成長できる養育力をもった場である」と定義している。また「それぞれの地域性、独特の文化に根ざして、地域住民と親子が主体的に活動を作り出しているような援助をめざしている。」と生態的な多機能をもつ活動体としてひろばを捉えている。その概念規定は「ぼっけ」にも当然ながら共通している。

その前提から大学施設としての「ひろば」の存在意義や独自性とは何かについて、櫃田(既出)に倣って、大きく3つにまとめることができる。

1. 大学の「ひろば」は大学独自の教育理念を基にその理念を具現化するための1つの場である。
2. こどもを核としたコミュニティの地域実践モデルとして意味のある存在である。
3. 子育て臨床の専門職の養成である。

以下、それぞれを「ぼっけ」にあてはめて記述する。

#### 1. 1 「ぼっけ」と学部教育理念

「(前略)天の人を生ずるや、これに身体と心との働を与へて、人々をしてこの通義を遂げしむるの仕掛けを設けたるものなれば、何らの事あるも人力を持ってこれを害する可らず。大名の命も人足の命も、命の重きは同様なり。豪商百万両の金も、飴やをこし四文の銭も、己が物として之を守るのこれは同様なり。(中略)地頭と百姓とは、有様を異にすれども其の権利を異にするに非ず。百姓の身に痛きことは地頭の身にも痛き筈なり、地頭の口に甘きものは百姓の口にも甘からん。(後略)」 「人たる者は常に同位相当の趣意を忘れる可ら

ず。人間世界にも最も大切なことなり。西洋の言葉にてこれを『レシプロシチ』又は『エクウヲチリ』と云ふ。」(福沢諭吉「学問のすゝめ」<sup>[3]</sup>より)

いうまでもないが本学園の創立者である九里總一郎は福沢諭吉の実学思想に傾倒し、私塾を開学した。その建学の精神は「実学に務め徳を養う」という校訓に表されている。福沢の「学問のすゝめ」はあまりに有名ではあるが、「初編」に提起された「実学」の主張を「職分」よりなる「民権」の思想に展開している。「学者の職分」を論じている箇所を読むと、「議論ばかりしていて実業つまり実地に行くことをしない」学者を無芸無能、あるいは「官途にあつて過ぐるの利を貪る」学者を偽君子と小気味良い程に一刀両断ぱさりと切り捨てている。そこから福沢の人徳についての考えがよくわかるが、筆者個人としてはなかなかユーモアのあった人物とも思うところである。現代にも通ずる学者のあるべき姿といえよう。以上本学の校訓はなるほど含蓄の深い言葉であり、こども学部教育にもその理念が反映されていると思う。

上記の「学問のすゝめ」から引用した文面からも、「命と人権を基底に据えた人間観にたつ」という大久保(2008)<sup>[4]</sup>の一言に集約されているこども学部の教育理念は、福沢諭吉の人権についての考え方に近いのではなかろうか。当然「ぼっけ」はいかにそれらを具体化して運営をしていくかが課題である。そこでの学生の参加は授業であれ、自由の参加であれ、保護者のいない保育参加の形であれ、その理念を活かすべく学生教育を意識した構造化されたものであることには違いがない。具体的には学生は参加の事前学習や事後の振り返りによる継続的サポートを受けることにより、気づきや自己発見をすることになる。また誰もが安心して参加できるよう支援スタッフ(教員・非常勤保育スタッフ)が常時参加して全体を見渡し、ファシリテーターとして学生や利用者に関わっている。

「ぼっけ」の利用に際して初めての参加者には専門保育スタッフが本学のひろばの説明を行うことにより、それぞれの利用者に「ぼっけ」というひろばのイメージがわくことであろう。また「大学に行けば学生にも教員にも会う」という自明の期待があり、「大学のなかにあるひろば」へ参加するポジティブな動機づけと思われる。そこでの学生と教員やスタッフ、また他の親子たちの相互のやりとりを見て、自らが「保育者の卵」である学生を支援する側にあることにも気づき、「ぼっけ」における利用者と大学の者たちと互恵的な(レシプロカル)存在を感じることであろう。そこでお互いが共に関わり合い「育ちあう」という学部教育の理念が浸透していくことの可能性がおおいにある。

## 1. 2 地域モデルとしての役割

かつて日本には3つの縁があると言われたが、すなわちそれらは「血縁」「地縁」および「社縁」であり、子育て期の親子にもその3つの縁が有機的に機能してさまざまな支援が直接・間接に働いていた。また、地域にはそれらの縁が結ぶ「場=空間」が確保されていた。現代の「ひろば」は地縁といえようが、地域にその機能を再生すべく、時間・空間と仲間を再構築する活動ともいえる。そこでは意識的に「ひろば」の中心は子どもであって、子ども

の人権を守り多様な家族の価値観も受容する場である。また「ひろば」に集団凝集性が高まり、参加者にその場の仲間意識が強まるだけでなく、さいたま市緑区にある「浦和大学内の親子のひろば『ほっけ』」に集うことによって、近隣への関心もおおのずと高まる（卑近な例では、ある母親は本学近辺にいいりサイクル・ショップがあるとの情報を得たという）。

たとえきっかけがごく世俗的なことであっても、「ほっけ」を利用することにより、大学機関が提供する人的環境の豊かさに触れ、心理・社会的な自己体験の実感と、ひいては参加親子も学生も自分の住むあるいは働く地域への帰属意識が培われていけばよいのではないだろうか。

特に「ほっけ」の特徴的なことの一つに学部教員の全員の参加がある。「ひろばの語彙には、色々な立場の人が集い、肩書はずして自由に語り合うという意味があるが、大学人としてその専門性だけでなく専門家・非専門家という枠を超えてそれぞれが一個人、一社会人として『ひろば』に関与し、学生・親子・地域の人々とともに『ひろば』を創る過程で、多彩な成人モデルとしての役割を担うことが期待されている」と櫃田（既出）が述べているように、どの教員もエプロンを着けカウンター内にいて事務を手伝ったり、フロアでおもちゃを片付けたり、親子と談笑したりと教員の顔を見せてはいない。支援者として実務経験のある教員や心理・福祉系の教員には馴染みやすい参加といえるが、まったく部外の専門家であるとか、家庭を持っていない教員であるとかでは多少参加しにくい形態かもしれない。場合によっては、教員というアイデンティティが揺らぐ者もあることも考えられるが、今までの実態は少なからず各人が「ほっけ」に場馴れして、お互いの「ほっけ」担当者としての成長を感じてきていると思われる。このように、親や学生のみならず、教員や学内の職員（現業をあずかるシルバー人材の方たちも食堂の業者の方たちも含めて）もが「ほっけ」を通じて、地域社会の出会いや人間関係を築く育ちを経験していく。もとより、学部教育・研究の充実が地域社会に向かって発信され、地域貢献に結びつくという考え方にたつのであるから、大学から発信されるものは地域ニーズに合うように工夫され、受け手に届かねばならない。満足することなく、とどまらずにそれらの方策を探っていくことがこれからも課題といえよう。

### 1. 3 「子育て臨床」を学ぶ開かれた教室

「子育て臨床」という言葉自体はまだ広く使用されていない歴史の浅い分野である。そして「ひろば」の支援スタッフは、現在圧倒的に保育士が中心であるが、さまざまなバックグラウンドを持ち、有資格者であれボランティアであれ、その専門性が求められている。

保育者養成校における学内「ひろば」は、子育て臨床の専門職の養成にも実践の場としての意義が高まると予測されるなか、「ほっけ」は学生に多くの学びの機会を提供している。

まさに学生にも親にも地域にも「開かれた教室」といえる。しかしながら、実は多くの学生たちは授業で「ほっけ」に入る以外の自由参加は4年間通じてあまり多くなく、プログラムの保育参加へは特定の学生におおよそ限られているようである。教員間でも「なぜ、学生たちは授業以外で入ろうとしないのか」という議論がされることがある。これは、恐らく

学生にとっての「教室」というものの特質といえよう。ただ、筆者はそのような学生—教室という関係でばかりではなく、「ほっけ」が開かれている時は、「子育て臨床」の場であるからこそと考える。現在専任の保育士の市川美恵子氏はじめ数名の学部理念によく通じたNP講座の受講経験があるような保育専門スタッフによりサポートされている。

自宅にいるように自分らしくいられるのが「ひろば」の理想とはいえ、「ほっけ」は他者との共同体である。多くの約束ごとはないものの、たとえば携帯電話を使用しないということは現代の若い人にとっては不便であり、また「ここではこどもさんに『駄目!』といわずに、『〇〇しないでね』など違う表現をしてみましょう」といわばよそ行きの行動を促される。それは親が無理するとか窮屈と感じたとしても、時間を経て親自身親子で遊ぶことに集中する意味を見出すのだが、学生もそれらを観察して学んでいることであろう。つまり、学生は「ほっけ」が支援者の「今、ここで」という「子育て臨床」の実践の場であることを実感する。

「臨床の場」に近づきたくない気持ちは、ある意味健康な心性である。学生が教室に入りたくないのは、自信がない、実習を失敗するのではないかといった不安がそうさせるともいえるが、整えられた授業環境なら安心して入れるのも経験の浅い者なら自然であろう。逆に「臨床の場」に非常に親和性が高いのは、希ともいえる。筆者が思うには、廊下から1枚ドアを開けて、「ほっけ」のコミュニティに1歩入る意味の大きさがあることであろう。「ほっけ」担当になっていない時の教員の目に「ほっけ」はどのように写るのであろうか。その日は異空間なのか、ひとつの風景なのか。参加していない時の学生も教員も、いわばマージナル・パーソン（辺境の人）ともいえようか。ある時はコミュニティの一員であり、ある時は隣人であり、旅人のようにただ過ぎ行くこともある。

こうして考えてみると、高校生が目目を輝かせて「ほっけが一番気に入りました」と述べて入学してくるが、開かれた「教室」と認知すると自由選択の場合は他事が優先していることであろう。しかし、大事なことは定期的に「ほっけ」が開かれていて、「よそ者であるか、その者であるか」が教育的に保証されていることなのかと思う。

## 2. 2013年度特定研による調査研究の報告

冒頭の「はじめに」で述べたとおり、本研究は特定研の研究費によって研究の成果を得ることができたので、以下報告する。

### 2. 1 他大学の子育て支援センター

他大学の学内子育て支援センターをホームページで検索した結果、以下の大学の情報を得た。検索順に箇条書きにて掲載する。

#### ①慶応義塾大学 「ソーシャルキャピタルを育む女性研究者支援」

湘南藤沢キャンパスの学生の保育参加を調査しようと思ったが、当事業は平成22年3月末日にて終了となっていた。



## ②相模女子大学 「子育て支援センター」

地域貢献活動に非常に力を入れており、子育て支援センターの取り組み内容にも興味深いので、訪問見学を実施することにした。

## ③埼玉大学 「幼小5年間のスペシャリスト養成をめざす地域連携型プロジェクト」

平成18年度文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム（教員養成G P）」採択「さくら子育てリソースセンター」の訪問調査を願うが、平成23年に既に終了した。

## ④関東学院大学 「関東学院 親と子のひろば おりーぶ」横浜市補助事業

主に0歳～3歳の就学前の子どもと保護者や祖父母、妊娠中のカップル対象「関東学院六浦こども園」1Fにて開所

大学の外に設置されていて、市の補助事業であることに鑑みて今回は見学を見送る。

## ⑤星美学園短期大学 「子育て支援室 ピーノのへや」

0～1歳の子どもとその保護者対象 開室が年間十数回で、開く時間が1時間半  
本学の親子のひろばの課題についての研究対象には適さないと判断する。

## ⑥東京都市大学 「子育て支援センター ぴっぴ」

2004年からの開設日数も週5日（大学の行事や休みは除く）と多く充実している。

「ぼっけ」開設に際して、伊志嶺美津子・元本学教授と櫃田紋子・元本学教授が見学して多くを参考にした経緯もあり、見学訪問を決定する。

## ⑦武庫川女子大学 「子育てひろば」西宮市の地域子育て支援事業の一環

2012年10月に大学学内の教室を使用して開設するが、半年後には学外の建物にリニューアルオープンした。その経緯を調査しても興味深いかと考えたが、関西で遠方のこともあり、調査は行わなかった。

## ⑧白梅学園大学・短期大学 「白梅子育て広場」白梅子育て広場G P委員会主催

委託事業ということで、今回は訪問調査を行わないこととした。

以上、これらの大学の子育て支援センターひろば事業を検索して、本研究のメンバーで検討し、相模女子大学と東京都市大学にある支援センターを調査した報告が次のとおりである。

## 2. 2 相模女子大学子育て支援センター

## (1) 訪問調査の概要

日 時：2013年7月25日（木）10：00～11：30

場 所：相模女子大学内「子育て支援センター」（訪問時は仮施設「茜館」）

調査内容：教員へのインタビュー、学内施設見学

調査協力者：尾崎康子氏 人間社会学部人間心理学科教授（子育て支援センター長）

トート・ボーカル氏 学芸学部子ども教育学科教授

金井千恵子氏 学芸学部子ども教育学科専任講師

調査者：菅野陽子 五十嵐裕子 丸谷充子



図1 茜館



図2 相模女子大学子育て支援センタースタッフ  
 教員と本学訪問教員  
 (左から 本学教員3名, 金井千恵子講師,  
 尾崎康子教授, トート・ボーカル教授)

## (2) 支援センター見学の報告

相模女子大学は、幼稚園から大学院まである女子の総合学園として、100年以上の歴史のある大学である。新宿から小田急線で32分の「相模大野」駅で下車、徒歩10分の静かな住宅街の中に位置している。正門を入ると、敷地内は緑が豊かで並木道や整った植え込みの向こうに校舎が点在しており、女子大らしい雰囲気を感じる大学であった。子育て支援センターは、改修期間であったため、仮の施設を見学させていただいた。仮の施設のある茜館(図1)は、相模原市の登録文化財となっているという旧校舎で、付設するフランス庭園も、相模原市の登録名勝として保存され、周辺から見学者が訪れるという、昭和初期の西洋文化の香りが漂う一角であった。

子育て支援センターのスタッフとして運営にかかわっている6名の教員の中から、センター長である尾崎康子教授、トート・ボーカル教授、金井千恵子専任講師の3名の方々(図2)から、事業の概要、それぞれの担当事業の詳細など、和やかな雰囲気の中で話を伺った。

子育て支援センターは2010年に開設し、発達が気になる子どもとその保護者への子育て支援、子育ての悩みを持つ保護者への援助、地域の子育て相互支援活動を行うことを目的として、子育て支援事業、ボランティア活動事業、研修事業、相談事業の4つの事業を、それぞれの教員の専門領域に基づいた実践活動として行っているとのことであった。

相模女子大学は日本経済新聞社発行の地域創造のための専門情報誌「日経グローバル」No.208、209の「2012年度地域貢献度ランキング」全国女子大学の部で第1位を獲得するなど、大学の位置する相模原市にとどまらない多くの地域貢献活動の取り組みを行っており、その取り組みの一環としての位置づけもされていた。またキャンパス内に幼稚園から大学院まである特色を活かしての学園内連携が行われており、子育て支援センターでも併設幼稚園部連携事業を行っていた。

以下、当日情報提供による資料からの事業概要である。

### ①相模女子大学子育て支援センターの事業概要

## a. 子育て支援センターの組織と設置要綱

### 組織

- ・ 人員構成：センター長1名、センター員5名、事務員1名（週3日、4時間／日）
- ・ 大学組織における位置付け：  
大学や学部が付属する施設ではなく、大学、短期大学部、高等部等と並列の一組織として学長が委嘱する。

### 設置要綱

「地域の子どもの健やかな育成を願い、発達障がい児及び健常児の子育て支援を目的として、相模女子大学子育て支援センターを設置する」

- ・ 発達障がい児及び健常児の子育て支援に関する臨床活動
- ・ 発達障がい児及び健常児の子育て支援に関する理論的・実践的研究及びプログラム開発などの研究
- ・ 地域の子育て世代・子育て関係者を対象とするエンパワーメント（資質能力向上）活動
- ・ 地域の子育て世代・子育て関係者を対象とする子育て相談、発達相談、障がい福祉相談などの相談活動
- ・ 学生を対象とする子育て支援に関する教育指導・研究指導活動
- ・ その他、必要と思われる事業

### 運営

#### 経営管理センター

#### a. 実践活動（平成24年度活動報告から）（表1）

- ・ 子育て支援事業（プレイパーク活動、子育て広場《こぐまクラブ》、親子教室、音楽療法、ベビー発達体操）
- ・ ボランティア活動事業（余暇支援、親子料理教室）
- ・ 併設幼稚園部連携事業（巡回相談、スーパービジョン）
- ・ 研修事業（講演会、セミナー、公開講座）
- ・ 相談事業（子育て相談、発達相談、福祉相談）

#### b. 教育活動

- ・ 人間心理学科学生は、親子教室に参加（表1）
- ・ 子ども教育学科学生は、プレイセンター活動、子育て広場、音楽療法、ベビー発達体操、ボランティア活動に参加

#### c. 広報

- ・ センターのパンフレット作成
- ・ 相模女子大学HPに掲載
- ・ 相模原市中心に研修事業などのチラシ配布
- ・ 相模原市の子育てハンドブックに掲載



表1 相模女子大学 子育て支援センターの事業概要

	対象者	担当者 責任者	実施回数	学生の参加	内容	
相談事業	子育て相談 発達相談	親子	尾崎康子	なし	子育て悩みや子ども発達などの相談。発達相談では、発達アセスメントを行い、発達支援の相談及び指導。	
	感覚運動発達・言語発達の相談と指導	親子	トート・ポータル		子どもの発達、特に運動、感覚、言語についての相談及び指導。	
	発達障害の治療教育発達相談	親子	金井智恵子		発達に問題を持つ子どもに対して個別の治療教育を実施。まずアセスメントを行った後、発達レベルに合わせた個別指導を行う。また、その親に対しても個別相談を実施。	
	障がい福祉相談 (2013年度～)	親子（小学生～卒業生）	河尾豊司		知的障がいのある人（学習・進路・生活）	
子育て支援事業	親子教室	発達障害及び発達が気になる幼児（前期5名、後期13名）とその親対象年齢：2, 3歳～就学前	尾崎康子	春学期 9回 秋学期 Aクラス7回 Bクラス7回 Cクラス4回	春学期 人間心理学科4年担当教員のゼミ生6名 秋学期 同3年ゼミ生22名 4年ゼミ生1名	子ども：個別対応における遊びによる発達支援 母親：親支援プログラム、親子遊び
	ベビー発達体操	幼児17名とその親	トート・ポータル	春学期 9回 秋学期 22回	子ども教育学科 3, 4年生担当教員のゼミ生4名	子どもの発達段階に合わせて感覚運動プログラムを行う
	プレイセンター活動／ワークショップ	子育て中の父母および学生	久保田力	15回		①「あそびのレシピ」作成 ②「ハザードキャンパスマップ」作成 ③プレイセンターデー開催（6/18、6/25、7/23）
	こぐまクラブ (2013年度～)	幼児とその親	金井智恵子	全9回	子ども教育学科4年生担当教員のゼミ生4名、2年生（補助）	子育て広場を実施。子どもグループでは他の大人や子どもと一緒に活動を楽しむこと、親グループでは、仲間づくり、子育てについての話し合い。
	音楽療法 (2013年度～)	ダウン症児 自閉症児	河尾豊司	5回		安心できる集団を形成し、音楽を通して楽しみながら集団に参加、同年代間の他者とのコミュニケーションを図る等、人の集まりと場を利用する療法的な目標を織り込みながら、余暇活動を楽しむ。
	ボランティア活動事業	COOK (こっこ)	ダウン症児 自閉症児	河尾豊司	2回	実施者 ボランティア活動団体「COOK」
どれみんみん		ダウン症児 自閉症児	河尾豊司	5回	実施者 ボランティア活動団体「どれみんみん♪」	ボーリング、シャボン玉遊び、相生祭りにて児童と一緒に模擬店実施及び、児童の預かりクリスマス会
併設連携事業	幼稚部との連携	幼稚部園児 14名	年少クラス（金井） 年中クラス（尾崎） 年長クラス（尾崎）	延べ12回	なし	幼稚部に在籍する発達が気になる子どもや特別な配慮の必要な子どもに対する相談・支援活動を行った。
研修事業	2012年度秋季子育て講演会	子育て中の親および一般市民（参加者80名）	講師：柴田俊一（浜松大学こども健康学科准教授）	1回 2012年 10月27日（土） 10:00～11:30		Nobody's Perfect / 完璧な親なんていない 虐待しない父母やオトナになるために～11月の児童虐待防止月間に向けて
	2012年度冬季子育て講演会	子育て中の親および一般市民（参加者78名）	講師：藤田継道（関西国際大学教授）	1回 2013年 3月2日（土） 10:30～12:10		発達に障がいのある子どもの認知・言語・社会性の発達を支援する方法
	国際シンポジウム・ワークショップ	参加者 87名	講師：Dr.Katalin LAKATOS, PT Marton SZERDAHELYI, Map hys. Ed, PT	1回 2013年 11月3日（土） 9:30～17:00		運動感覚統合プログラム国際シンポジウム
	参加者 大人41名 子ども15名	講師：Dr.Katalin LAKATOS, PT Marton SZERDAHELYI, Map hys. Ed, PT	1回 2013年 11月4日（日） 9:30～17:00		運動感覚統合プログラム国際ワークショップ	

相模女子大学「平成24年度 子育て支援センター事業報告」より作成（敬称略）

#### d. 子育て支援センター利用者のべ人数（2012年度）

センター員141名、学生1,369名、大人317名、子ども346名、その他15名、計2,188名

#### ②学内施設見学

見学をした2013年7月25日は、前述のとおり、改修工事のため、実際の子育て支援センターを見学することができなかった。工事中は、学内にある茜館で臨時に開設されていた(図3)。下の写真は、相模女子大学HPから引用した子育て支援センターである(図4)。仮の施設は、カラフルなカーペットが敷かれ、小学校の教室二つ分くらいの広さがあり入口で靴を脱いで中に入る。入口近くに受付のカウンターがあり、お知らせなどが置いてある。HPの写真同様、おもちゃなどは隅の方に置いてあり、大人用のテーブルが置かれていた。親子教室は体操などで使用するおもちゃや器具などは、使用する時に必要なものを出してくるようだった。



図3 子育て支援センター（仮設）内の様子（茜館内）



図4 ホームページから

#### ③相模女子大学 子育て支援センターの特色

相模女子大学子育て支援センターの事業は、教員ごとの課内活動、課外活動の場として、地域に向けて募集を行い、申込みをした親子に対する活動であることが特色であった。学生の学びの機会提供として、授業として半期または通年で授業を履修している学生が参加する形式であった。常設ひろば等の活動は行っていない。本学のおやこの広場「ぼっけ」は、親子が自由に集うノンプログラム型の「ひろば」事業がベースとなっており、講座募集なども「ぼっけ」の利用者に対する講座募集が中心であることが大きな違いであった。また、設置の目的に掲げられているように発達障がいのある子どもへの相談事業、感覚運動遊びなどの療育的なプログラムを行っていることが特色であった。

尾崎康子教授は親子教室に授業で参加する学生に期待することとして、「親支援は、発達理論的アプローチを教員が行う。子どもは学生とのかかわりの中で、子どもがなついてくれ

ることによる人間関係の形成、学生と子どもとの相互作用の中での両者の育ちを期待する。学生には保育や心理の専門性を求める関わりを期待していない」と話され、保育技術の習得ではなく、人としての触れ合い体験による共感や信頼感の形成などを目的としていた。また、子どものプログラムは学生のみで実施するとのことであった。本学の場合、学生が保育をする際には、必ず保育士のスタッフが見守ることから、学生だけで実施することによる困難はないか質問すると、ある程度、実習などで経験を積んだ3年生が対象で、3年次前期に教育的トレーニングを行い、後期に親子教室に参加する流れになっているとのことであった。

トート・ボータル教授のベビー発達体操は、感覚運動を中心に、6ヶ月～2歳までのグループと2歳～4歳のグループにわけて、親子、学生とで身体運動のプログラムを行い、発達障害などを研究テーマとする学生が参加するとのことであった。

金井千恵子講師によるこぐまクラブは、親子教室同様、親プログラムと子どもプログラムが並行して行われる。親グループは、親同士の仲間作り、情報交換などのお話、子どもプログラムは、制作や身体を使った遊びなどを学生と一緒にやる。このプログラムは、課外活動であるが、担当教員のゼミ生から参加者を募り、4年生を中心に2年生が補助として参加するそうである。本プログラムでは4年生はあらかじめ指導案を作成してからプログラムに臨むとのことで、保育士、幼稚園教諭を目指す学生にとって実践的な学びの場となっていた。

今後は、開設3年間の事業実施を見直し、認定こども園の構想もあることから、系列の幼稚園との更なる連携も視野に入れて、事業の拡大・整理を検討中とのことであった。

## 2. 3 東京都市大学子育て支援センター「びっぴ」

### (1) 訪問調査の概要

日 時：2013年12月17日（火）10：45～12：30

場 所：東京都市大学等々力キャンパス内

調 査 内 容：大学内のひろば施設見学と施設運営に関するインタビュー

調査協力者：東京都市大学人間科学部教授 子育て支援センター「びっぴ」主任  
小川清美氏

調 査 者：菅野陽子 五十嵐裕子

### (2) 「びっぴ」見学の報告

以下、当日の支援センターについての説明と見学の結果をいくつかの項目に整理して報告する。

#### A. 「びっぴ」創設の経緯

現在子育て支援センター「びっぴ」を運営している東京都市大学人間科学部児童学科は東横学園女子短期大学を前身としており、「びっぴ」は、2004（平成16）年6月、東横学園女子短期大学時代に、大学内子育て支援センターとして設置された。東横学園女子短期大学が新たに保育学科を開設しようとした際に、所管の東京都では保育士養成はすでに充足されて

いると考えられていたため、特色ある教育活動を打ち出す必要があった。そこで、「学生が子育て支援を実際に学習する場」が想定され、地域に開かれたつどいの広場「びっぴ」が学内に併設されることになったとのことである。

「びっぴ」は、東京都世田谷区の旧東横学園女子短期大学のキャンパス、現東京都市大学等々力キャンパス内の3号館2階に常設のセンターとして設置されている。東京都市大学等々力キャンパスは、東急大井町線等々力駅から徒歩10分、また二子玉川、田園調布方面からの路線バスで「都市大等々力キャンパス前バス停」も利用可能な、交通の便のよいところに位置している。

## B. 運営について

東横学園女子短期大学時代は短期大学の予算により運営されてきたが、2009（平成21）年に東京都市大学となってからは、人間科学部による運営となり、学部予算で対応している。実際には人間科学部児童学科15名の教員のうち、8名の教員からなる「びっぴ」運営委員会が運営にあっている。運営委員会への参加は各教員の自由意志とのことである。

開設日は月曜日から土曜日までの週6日、開設時間は月曜日からは金曜日までは10時から16時まで、土曜日は10時から13時までである。授業のない期間も同様に開室しているが、8月は開室しておらず、そのこともあり、行政からの補助金は受けていない。

利用料は、保険料、維持料等として1日200円となっており、出入りは自由である。利用者は「びっぴ」入り口前の券売機でチケットを購入する。利用代金の回収、新規利用者の登録、ホームページの更新は、大学事務局が行っており、「びっぴ」内の清掃は他教室と同様に清掃業者が行っている。

スタッフは、保育士あるいは幼稚園教諭免許を有している保育者11名がローテーションを組み、毎日3人の保育者がスタッフとして参加している。スタッフが交代で昼食をとる時間帯には、「びっぴ」運営委員会に所属している教員が、授業に差し支えない曜日に「お手伝い」として入っている。1人の教員がある曜日を毎週担当する場合もあれば、1つの曜日を複数の教員で分担している場合もある。保育スタッフは「びっぴ」での支援業務（親子対応）の他、月1回の会議への参加、毎月のホームページ上の「保育士さんからのお願い」の執筆（毎月順番に担当）などを担当している。月1回の会議（運営委員会）では、利用親子や設備・備品等のこととあわせ、「びっぴ」に参加する学生のことについても気づいたことの報告が保育士からなされている。

## C. 「びっぴ」の環境

等々力キャンパス3号館の2階、50坪ほどの1室を利用している。来室した親子が利用するトイレは、「びっぴ」の部屋を出た右手に設置され、おむつ交換台や洗濯機なども完備された広く明るい空間となっている。「びっぴ」には、以前は付属中学・高校の図書室であったという、自習や会議もできる広い実習指導室が隣接しており、同じフロアに、児童学科教



員の研究室も続いている。

3号館1階のエントランススペースにバギー置き場が設けられているが、バギーの台数が多く、置き場には苦勞されているそうである。利用者は階段で2階にあがり、「びっぴ」の入り口前に設置されている券売機でチケットを購入して入室する。入り口前にはコート掛けが用意されている。玄関で靴を脱ぎ、靴は靴箱に入れ、受付カウンターで受け付け手続きを行う。荷物は入口付近の棚に置くが、貴重品を入れる貴重品袋（布製の肩掛けポシェット）が用意されており、貴重品はそのポシェットに入れて身に付けておくことになっている。

室内は50坪（170㎡）ほどの広さの長方形の部屋で、入り口より向かって右側には手前よりベビーベッド2台、受付カウンターが並び、あとは壁面が棚となっており、遊具の収納や、装飾等の場として用いられている。右手壁面にあるドアは授乳室への入り口となっている。入り口より正面の壁面は木製のテラスのように2段になっており、子どもたちが階段を上って高いところから室内を見渡したり、滑り台で滑り下りたりできるようになっている。その下のスペースはロディや木馬などのやや大きめの遊具の収納やおままごとコーナーとして活用されている。向かって左側は一面窓の明るい空間で、遊具がおかれていたり、ローテーブルやソファ、ピアノの弾けるコーナー等が設けられていたりする。向かって左側の最も手前（入口側）は、利用者が自由に使用できるポット、電子レンジ、冷蔵庫、流しが備えられた食事のスペースとして区切られており、このスペース内であれば何時でも飲食が可能となっている。また同じ3号館にある学生食堂の利用も可能である。部屋の中央には、半円形の低い本棚で仕切って丸い座卓をおいたスペースが2つ設けられている。

「びっぴ」室内には、海外の木製のものを中心とした遊具や布製の人形、乗って遊べる遊具、ピアノやその他楽器、400冊もの絵本等厳選された遊具や絵本等が備えられ、自由に遊べるようになっている。遊具や絵本は季節に応じて適宜入れ替えられている。その他、はさみやのり等が入ったお道具箱やエプロンシアターのセットが複数壁面の棚にセットされており、希望する利用者に貸し出している。

#### D. 利用者支援のスタンスと利用者の状況

「びっぴ」のパンフレットには、「びっぴ」について、「親と子どもがともにのんびり過ごす場所」であり「大人が、子どもと一緒にいることが楽しいと、心身ともに実感できる空間」であり、「その空間には人々が集まる場と、お互いに暖かく受け入れられているという安心感」が必要であると述べられている。「びっぴ」では、子育て支援について「親子が互いに親子の触れ合う姿を見合い、そこからの相互の学びが子育ての力となる」<sup>[5]</sup>と考えているため、保育者には、親子に対して直接指導するのではなく、「見守る」ことが求められている。しかし実際には直接指導をするのではなく、「見守る」ことに徹するという支援はなかなか難しいとのことで、利用者にとのようにかかわっていけばいいのか、保育者の悩みや不安とともに考え合うために、月1回の運営委員会にて保育者と教員とで具体的な親子の姿を通して子育て支援の理念の共通理解が図られている。



「見守り」を基本としつつ、暖かい雰囲気醸成して信頼関係を深め必要な時には助言をする、そのようなスタッフの支援姿勢は、1日約50組、創設以来のべ約22万の親子の利用を導いている。利用者の3分の2は世田谷区在住である。交通の便もよいことから、近隣の市区町村に住む母親が子どもを連れて集まり、「同窓会」を行うこともあるとのことである。

開室時の危機管理としては、不審者対策として非常ベルと4台のカメラが設置されており、カメラの映像は事務局でチェックできるようになっている。東日本大震災の際には、事務局職員がすぐに駆けつけてくれたとのことである。「びっぴ」内での利用親子のけが等については、大学所属の看護師による対応が可能とのことであった。

#### E. 学生の学びの場としての「びっぴ」

「びっぴ」は学生の学びの場として創設された。学生は「子育て支援演習（2単位）」という授業で、「びっぴ」に参加している。「子育て支援演習」は卒業必修科目に指定されており、学生は15コマの授業を2年生から4年生の3年間をかけて、1年間に5コマ分ずつ履修する。年間5コマの授業のうち、2コマは前期、後期に各1回ずつ「びっぴ」に入り、残りの3コマは「びっぴ」への入り方や観察の仕方に関する事前指導や事後指導等教室での授業となっている。「びっぴ」に参加する学生は2人ずつで、学生は3年間をかけて、「親子の観察」→「保護者と話す」→「親子と関わりながら保護者と話す」→「保育者業務を手伝う」→「自分でテーマを設定する」と学びを進めていく。「びっぴ」での演習は、1コマ90分のうち60分が「びっぴ」での演習、残り30分で記録を書く形式となっている。「びっぴ」での学びの記録は、学生一人ひとりの個別ファイルに綴じられ、「びっぴ」に隣接する実習指導室に保管されている。

「子育て支援」の授業では卒業までに最低6回の「びっぴ」実習を行うが、2年生後期からは、自由に何回でも自分で課題を設定して「びっぴ」に入ることができることになっている。その際も60分は「びっぴ」、30分は記録を書くことにあてることとされている。自主的な「びっぴ」参加は多い学生で10回前後、平均すると1回ほどであり、自主的な参加が多いのは4年生とのことである。卒業論文のための「びっぴ」でのアンケート調査は許可していないが、その予備として利用者から「話をうかがう」ことは認められている。入学の理由に子育て支援センター「びっぴ」が学内にあることをあげる学生が多く、「びっぴ」に入りたいと希望をもっているのは1年生であるとのことだが、1年生で「びっぴ」に参加しても「こどもと遊ぶ」ことに終始してしまうため、1年生での「びっぴ」参加は認められていない。だが、「乳児保育」や「保育内容」等の授業において、利用者が不在の際に、子どものための環境やおもちゃについて学ぶための見学が組み込まれているようである。

### (3) 考察

#### A. 大学が子育て支援センターを設置していることについて

「びっぴ」は現在、学部予算で運営されているため、経済的には必ずしも潤沢ではなく、



図5 エプロンシアター



図6 ピアノのあるコーナー

遊具等の購入は教員の寄付で賄ったり利用料の値上げを考えたりせざるを得ないなどの状況にあるとのことだが、それでも「びっぴ」がなくなることはないのは、「授業の場であるから」とのことであった。「びっぴ」は、行政からの補助金を受けないまま年間200日以上開室する地域の子育て支援センターとして大きな役割を果たしている。子育て支援の場として、支援の理念と方法、環境、スタッフも、より最善のものを揃えているのは、もちろん利用者のためでもあるが、基本的には教育の場として、学生に、より最善の子育て支援の学習の場を提供するためであろう。あくまでも「授業の場」であることに軸足をおいているのは、大学が大学内に「ひろば」を設置していることの大きな特色といえよう。

### B. 「びっぴ」の環境

前述のように、「びっぴ」の環境は、親と子が自由にゆったりと過ごせること、おとなが子どもと一緒にいることが楽しいと思えること、互いに受け入れられているという安心感をもてるように整えられている。このような支援の理念と、それを具体化するための環境、スタッフのあり方は本学の「ほっけ」と共通するところである。「びっぴ」において特色的なことは、親子で折り紙や工作が楽しめるような「お道具箱」が準備され希望者に貸し出されること、エプロンシアターについても作品ごとにケースにセットされ親子が自由に楽しめるように準備されていること（図5）、自由に電子ピアノを演奏できるようになっていること（図6）、ローテーブルやソファが多く用意されていること（その分広い空きスペースは失われるが）等である。親子が楽しく過ごすためのしかけが豊かに用意されているように感じられた。

### C. 「びっぴ」での学生の学びについて

上記の、「エプロンシアターが親子で楽しむものとして準備されている」というのは、「びっぴ」への学生の参加の仕方の違いにも由来していると言えるかもしれない。学生の教育活動において、「びっぴ」はあくまでも「親子支援」「子育て支援」の場として位置づけられている。そのため、学生の「びっぴ」実習での学びは、①親子観察、②親子と関わりながら保護者と話す、③保育者業務を手伝うことに集約され、「びっぴ」内において学生が手遊

びやパネルシアター等のサークル活動を経験することは認められていない（そのような活動を行いたい場合は、利用者に声をかけ、活動への参加を希望する親子には「ぴっぴ」から別室に移動してもらい、別室にて行うようにしているとのことである）。また、1年生の「ぴっぴ」への参加は、利用者が不在の、「ぴっぴ」が開室していない時間帯での見学に限られ、体験的に「ぴっぴ」に携わるのは2年生からとされている。



図7 研究会の様子

1年生ではまだ「自分勝手に子どもとふれあいたいという気持ちを満足させる」ことになりがちで、「相手の気持ちに配慮ができる」ようにならないければ「未来の保育者として必要な『力』を身につけて」いくことにはつながらないと考えられているからである<sup>[6]</sup>。この、学生の「ぴっぴ」への関わり方は、「『ぴっぴ』で何を経験し、何を学んでほしいか」という学習のねらいともかかわっている。本学では「フィールド演習」という必修科目を1年生に設け、1年生から「ぼっけ」での体験学習を積極的に組み込み、また「こどもと音楽」「声とからだ」等の授業で学んだ保育技能を、サークル活動として親子ひろばで体験する学びを行っている。今回見学させていただいた東京都市大学と本学はともに、学生への教育活動を目的に学内に親子ひろばを設置、運営しているが、学生の親子ひろばへの関わり方や期待されている学びは異なっていることが今回の見学を通じて明らかになった。本学では、学内親子ひろばを通して学生に何を学んでほしいと考えているのかを再定義し、その成果を検証する必要があるだろう。

## 2. 4 外部講師による研究会

小川清美先生（東京都市大学人間学部教授、学内子育て支援センターぴっぴ主任）招へいの研究会が、2014年3月17日（月）、14時から16時の2時間、「大学学内における子育て支援センター（広場）の役割と運営について」というテーマにて行われた。小川教授からは、大学内子育て支援広場における子育て支援の意義、広場運営の意義や要点、広場を用いた学生の教育や実習等、実践例をふまえた意義深いご講演を頂いた。以下に要点を箇条書きにする。（研究会の様子は図7を参照）

### <講演内容>

- ・ どうして大学内で子育て支援を行うかという、保育者養成をしている大学の学部だからこそ必要であると考えているからである。
- ・ 平成16年から保育者養成の学部を創設し、短大ながら三年制であり、地域に開かれた、地域の親子が参加できる子育て支援の広場を設置した。
- ・ 子育て支援の広場の場所は、以前は中学高校の図書室であった所をリフォームして用いて

いる。リフォームは、おもちゃづくりの専門家の方に依頼し、希望のとおりに行うことができた。おもちゃは、現在ではなかなか手に入らない、木のおもちゃを中心とした高価なものを準備した。

- ・広場の名称「ぽっぴ」は、ずっと後に決まった経緯がある。
- ・保育者は2人から始め、徐々に増員して現在11人在籍している。全員が非常勤（時間給）で、日に3人ずつがローテーションで入っている。
- ・学生にどのように「ぽっぴ」に関わりを持たせられるかを検討し、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に申請を行った。その結果、平成17年から年間1,000万円の財政支援を受けて、シンポジウムや講演会等、年間に数回開催し、報告書を発行してきた。
- ・教員たちが、ニュージーランド、カナダ、スウェーデンの大学や子育て施設を訪問し、現地の講師を日本に招いて、講演を行ってきた。
- ・四年制大学に変更になってから、カリキュラムに「子育て支援演習」を追加した。「子育て支援演習」は、2単位の卒業必修科目で、2年生から3年間履修する。
- ・「ぽっぴ」は当初、子育て支援センター（仮称）と呼んでいた。行政との連携の中で、世田谷区に行っている子育てセンターと名称が紛らわしいため、愛称をつけてほしいと依頼があり、「ぽっぴ」と愛称がついた経緯がある。名称は、アストリッドリンドグレーン著の本のタイトル「長くつ下のピッピ」に由来する。
- ・平成20年告示の「保育所保育指針」及び「幼稚園教育要領」のいずれにしても、子育て支援のできる保育士、幼稚園教諭が求められるようになってきた。
- ・保育教諭が勤務する認定こども園ができるが、保育所の中の保育、幼稚園の中の幼児教育だけでなく、今後ますます地域の保護者の支援が求められるようになる。
- ・どうしてこれだけ子育て支援を行わなければならなくなったかの大きな一つの要因は少子化である。赤ちゃんやこどもを知らないで親になっていることが、親の子育て不安につながっている。具体例として、自我が芽生えて泣き出す幼児に対して、「今までいい子だったのに、なぜ言うことを聞かなくなったの」と不安になる。こどもの泣き声などの異変に対して、地域の方の通報義務があるが、通報をもとに児童相談所の訪問があると、訪問を受けた母親は近隣住人への不安感が高まったり、不信感が強まったりして、引っ越してしまうなどの事例がある。
- ・公園などへの外出も敬遠しがちである。地域交流が希薄でママ友がいらないだけでなく、不審者との遭遇を恐れて外出出来ない現状が有り、子育て不安は高まっている。
- ・行政で保育領域に「サービス」という用語を用いてしまったことが、現場に影響しているのではないかと懸念する。こどもを預かってもらって、担当保育士に「ありがとう」の一言がない親も増えている。行政は、少子化を防ぎ、出生数の増加を促進する目的でサービスを強調したが、結果に結びついていない。
- ・大学が子育て支援広場を運営する上で、予算に関して、開室期間の問題がある。基本的に

週6日開室しているため、区に予算を申請することで財政的な支援が見込めるが、支援を受けると定期的な開室が望まれる。しかしながら、大学の年間予定で、春期休業期間は、一週間の閉室を行う範囲ですむが、8月はほぼ閉室してしまうため、開室するためには運営上の無理が生じてしまう。そのため、区の財政的支援を受けずに、運営を行っている。

- ・学内支援センター「びっぴ」は、平成16年に開設され、10年目の運営を迎える。地域に開かれた親子の遊び場であり、また、学生が「子育て支援」を学習する場である。
- ・学内支援センターの利用家族数は、延べ約22万5千人である。1日に約100名の参加者がおられ、新規の家族は10組から20組ある。年間およそ2万人の参加がある。
- ・学内支援センターの子育て支援において、大切にしていることは次の(1)～(3)である。

#### (1) 共感型支援

保護者へのやさしい心配り

施設とおもちゃなどの遊具の充実

保護者や保育者たちのコミュニケーションの場であること

#### (2) 自由さ

制約はほとんど設けられていない（禁止事項はほとんどない。紙おむつの持ち帰りのみ約束事項である）

飲食は、飲食コーナーにていつでも可能である

#### (3) 情報を得られる

保護者から

保育者から

資料から（センターでは主に世田谷区から配布される資料を提供）

\*子育て支援において大切にしたい思いは次の内容である。

- 親子のすべてを受け入れること
- すぐに親の行動を変えようとしめないこと
- 親自身が相談するまで待つこと
- 親を誉めること
- 子どもの成長を親に伝えること
- 親子を見張るのではなく見守ること
- 子どものそばにいたことが楽しい、幸せという雰囲気があること
- 大切にしたい思いは、多くの子育て支援センターに共通する事項であろうと思われる

- ・気になる参加親子であっても、学内支援センターでは、すべてを受け入れる。
- ・ベテランの保育士や保健師は、効果的な内容を伝えることが可能であるが、言わずに対応する。
- ・本当に必要な場合には、親の方から保育者に聞いてくるため、親から相談があるまでとにかく待つことが大切である。親からの相談まで2年間の期間を要した事例もある。



- ・親を誉めることをよく行っている。特に大変な子どもを抱える親には誉めることが大切である。
- ・親が子どもの成長を当たり前にとらえていることがよくある。子どもが歩けるようになったことや、他の子どもにおもちゃを貸すなど出来るようになったことに対して、保育士が感動を伝えると、親があらためて子どもの成長に気づくきっかけになる。
- ・保育士や幼稚園教諭は、「親が子どもの様子を観ていない」等、見張ってしまう傾向にある。見張るのではなく、見守ることを意識する。
- ・保育者は、一定の時期に一定の内容を行わなければならないという状況にあると、子どもたちの出来ないことや目標を達成していないことについて意識が向いてしまう。子どもの側にいることが楽しい、幸せという雰囲気は保育者に常に現れている、雰囲気として出ていることが大切である。
- ・子どもの側にいることが楽しい、幸せという雰囲気は、笑顔に現れる。
- ・保育者が笑顔でいられるようにするため、休憩は必要である。保育者が一人になれる空間と時間を、保育時間に一時間設けている。保育者は自らの選択で休憩時間をとるようにしている。
- ・学内支援センターの参加料は200円（開設時は100円）であるが、無料お試し券を2枚つけて配布した結果、開設時の6月、7月に延べ5千人ほど訪問があった。非常に多くの地域の親子の参加があり、極短い期間で地域の方々への認知度が上がった経緯がある。
- ・行政との連携において、子育て支援の重点地域としての機能を期待され、一時保育の可能性についても検討の依頼があった。一時保育では、子どもの不安も高まるため、不安の強い子どもたちと安心して過ごしている親子が共に過ごすことに困難がある。一時保育を実施するためには、学内支援センターとは異なる場所が必要と考えるが、キャンパス内に準備することは困難である。
- ・地域との連携は不可欠である。世田谷区に子育て支援センター 25箇所（内4箇所が重点地域）あり、リーダー交流会が行われている。
- ・広場の設置は、様々な形態がある。公民館、保育所、施設に設置されている広場もある。
- \* 地域の子育て支援の充実は不可欠である。そのためには、次の内容が大切である。
  - 自分のところだけではかかえこまない
  - 連携すること
  - 自分の所でできることを確認し、近くの他の関係機関と協力すること
  - 地域で支援のスタンスを話し合うこと
  - キーになる人を確立すること
- ・キーになる人は、広場のベテランの保育者等である。若い世代の保育者をどのように育てていくかは課題である。
- ・学内支援センター「ぴっぴ」について、部屋の大きさは170平米（50坪）、大学内のビルの二階にある。入り口横の階段脇にベビーカーを停めて、階段を登って入室する。

- ・利用者は、生後8日の新生児から、幼児のきょうだいの小学生もいる。1歳児が最も多い。屋内であるため、ハイハイから、よちよち歩きのごどもたちの参加が多いようである。
- ・ピアノが設置されており、おもちゃとして利用可能である。電子ピアノで音楽をかけることもあれば、親子が演奏することもある。保育者や学生が演奏をすることはない。
- ・飲食コーナーで飲食することを参加親子が自発的に守っている。飲食コーナーでは、アレルギーが心配である。飲食コーナーだけで食べるようにと最初に説明しているが、その理由として「アレルギーで困ったことがあるなど、大変なことがあるといけないので」とお願いしている。
- ・学内支援センターを利用する親子は、学生食堂も利用可能である。こどもたちが「ぴっぴ」での飲食を希望することが多いようである。
- ・保育者は、全員有資格者（保育士または幼稚園教諭）で、毎日3名の保育者が常駐する。専任保育士はおらず、非常勤11名でローテーションを行い、時給制である。
- ・開設時間は、月曜日から金曜日は午前10時から16時までで、土曜日は10時から13時までである。
- ・保育者の勤務時間は9時半から16時半までで、定まった昼休みはない。交代で昼食をとり、昼食時間中も支給対象である（但し、大掃除や会議の際は実働時間で支給となる）。
- ・毎月1回、教員と保育者で委員会を開催する。委員会では、保育者から気がついたことや、備品のこと、実習に入っている学生のこと等について伺う。できることから改善していく。委員会の記録は、児童学科の教員全員に配布し、共有している。
- ・児童学科の教員15名のうち、8名が自主的に委員となっている。委員は、保育者の昼食時間を中心に広場のお手伝いをする。
- ・教員は研究日がなく、毎月の出勤日数が決まっている。時間割で都合のよい曜日と時間帯に、委員の教員は広場に参加する。
- ・毎年1回、事務を含めた運営委員会を開催している。メンバーは、学部長、及び3名の教員で構成されており、主に予算について審議する。広場利用料の値上げが課題である（2011年3月までは一家族100円、その後200円）。
- ・年間の経費は600万円を少しオーバーする。現物寄付の実施を促進している。
- ・広場の掃除は、教室掃除の業者が行っている。
- ・毎日の利用者の登録（パソコン入力）と利用代金の回収は、大学事務（総務）が行っている。ホームページの情報更新も総務が行う。
- ・学生食堂の利用は、授業期間は学生優先時間を設けてある。広場利用者は、学生優先時間外に利用する。学生食堂は11時から18時まで開いている。授業のない期間は、11時半から13時半までで、土曜日は休業である。
- ・広場で出会った母親たちで子育てサークルができ、交流が生まれている。
- ・土曜日は、父親の参加が多い。父親同士で知り合いになり、交流が生まれている。

\* 学内支援センターの課題として次の3つがあげられる。

経費のこと

混雑時のベビーカー置き場をどうするか

学生食堂での親子マナーのこと

・ 学生食堂で子どもが走り回っても対応しない親が増えているため、対応が求められている。

\* 特筆注目すべきこと

・ 事務職員の方々の厚意が大きなバックアップとなっている（震災時の対応等）。

・ 大学の第三者評価においてプラス評価を得ている。

\* 学生の学びについて次の実践例が紹介された。

・ 2年生から4年生の3年間に渡って、「子育て支援演習」（演習2単位、卒業必修科目）を履修する。演習内容は次の通りである。

<「ぴっぴ」実習のテーマ>

2年生前期：親子の観察

2年生後期：保護者と話す

3年生前期：親子と関わりながら、保護者と話す

3年生後期：親子と関わりながら、さりげなく保護者と話す

4年生前期：保育者業務を手伝う

4年生後期：自分でテーマを設定する

・ 学内支援センターがあることで、親に関わりを持ち、親の気持ちを知る機会ができる。

・ 学生は、自分で広場に入る日時を決めて参加する。

・ 学生は、1回の参加時間は60分、同時間に入れる学生は2名までである。

・ 広場参加後、30分間で記録を取る。記録用紙は、学生個人の「ぴっぴノート」に入れ、「ぴっぴ」の横にある実習指導室の棚に収納する。参加と記録で90分である。

・ 広場での実習の他に、2年生、3年生、4年生でレポートを課す。2年生は、本を1冊読んで1200字以上の感想文を書く。3年生は授業内でレポートを書き、最終的な4年生のレポート課題は「自分の理想の広場づくり」である。

・ 一人の学生が最低6回の「ぴっぴ」実習を行う。

・ 「ぴっぴ」の大学内での教育目的の利用として、こどものおもちゃ研究のために造形の授業で入るなど、様々な授業で目的に応じて使用している。

・ 2年生後期からは何回でも「ぴっぴ」に参加してよく、これまでに12回参加した学生がいる。

・ 自主的な参加について、4年生になると卒研テーマ等で自主参加が増える。2年生はほとん

ど入らない。

- ・観察の仕方、観察記録の取り方は3年生で学ぶ。
- ・参加回数が多い学生ほど、どのように行動すればいいのかがわかり、非常に自然な状態で親子と関わるができるようになる。また、保育者からも褒められるようになる。教員が入った場合、学生の授業とは異なるあらたな様子がみえて発見がある。
- ・人が育つには時間がかかる。親が育つ中でこどもが育っていく。こどもが育てば親も育つ。そのような親子との関わりの中で学生も育っていく。

### 3. 学部教育における「ぼっけ」のコンセプト・マップ

#### 3. 1 特色ある教育としての期待

コンセプト・マップは、多様な考えを「見える化」するツールであるが、学部会議やこどもコミュニティセンター運営委員会などで討議される「ぼっけ」に関してのブレインストーミングとして適用できるかと思われる。キー・コンセプトを中心に各コンセプトに矢印をつけて、どのように繋がるか書いていく作業が、今後特色ある教育をさらに明確にしていくと思われる。「ぼっけ」開設以来、こども、親、学生、教職員そして地域が創りつつある「育ち」を1本の樹木にたとえ、その教育的成果を「ぼっけの果実(み)」として1個ずつつけていくイメージを、学部のなかで持っているが、樹木が主要ボックスで、各果実は階層化した従属ボックスとみてもよいかもしれない。

いずれにしても、「ぼっけ」に対するさまざまな考えや意見を吸い上げて、学部全体で一つのコンセプト・マップを描いていくことが考えられる。昨年からは、「ぼっけ」の専門スタッフの方がたと委員会メンバーで「ぼっけ・スタッフミーティング」を年に数回開催してきた。順調に成長し根をはってきた樹木に、多種多様な栄養素が加われば、さらに色艶がよい果実、見てくれは悪くても美味しい果実など多様な特色ある果実がたわわに実ることを期待したい。

#### 3. 2 カナダの大学教育からの学び

音楽にたとえるとあたかも通奏低音のように、学部教育の要にカナダの家族支援やNPの人権思想が浸透している。本研究の直接の対象ではなかったが、はずせないコンセプトである。以下、紙面の都合上大学教育にしぼって簡単に述べておく。

##### (1) ライアソン大学

2008年3月、カナダ・トロント市にあるライアソン大学と学術交流提携を結ぶ。ライアソン大学の家族支援のプログラムは、現任教育プログラムであり、本学はライアソン大学との相互交流によって「ひろば」運営に多くの示唆を得ている。また、一昨年はライアソン大学幼児教育学科の学部生が1名研修にて「ぼっけ」で実習を行ったが、参加親子も学生も身近にカナダの大学生（本人はスウェーデンからの留学生）を感じ、本学における国際的な雰囲気を感じ、「ぼっけ」周辺において肌身で感じる意味は大きかった。近い将来は、双方の大学で交換

留学生やライオン大学からの研究者が本学で海外研修および研究を行うことが実現していく方向に期待がかかる。

本紀要の執筆者のうち4名は「カナダ家族支援研究会」のメンバーでもあるが、さらに学部全体でライオン大学との学術交流を盛り上げていきたい。

### (2) カナダのED (エデュケーショナル・ディベロプメント) の示唆するもの

カナダの高等教育についての日本語文献は少ないが、土持ゲーリー (2009<sup>[7]</sup>) は「大学の多くは州立で、大学博士課程のある大学、大学院・学部レベルの大学、学士課程教育中心の大学に分かれる。大学のレベルは国際的に高く、かつ水準が揃っている」という報告を行っている (これをしてライオン大学が質の高い大学であることがわかる)。

さらに、土持は「カナダにおいてはFaculty developmentを超えて、Educational development という視点から、幅広く教育環境全体の改善・向上をめざし、教員および学生双方の資質を高めることに努力している。(後略)」と結んでいる。

### 3. 3 今後の「ぼっけ」における学生教育実践の試みと課題

これまでに「ぼっけ」における様々な取り組みがなされてきた。そして、本研究の契機となった「今、なぜ学生の保育参加なのか」について検討を深めるために、他の2大学を訪問調査したが、相模女子大学は専門教員と学生のためのプログラム化された活動であり (保育士在室を切望されていたが)、東京都市大学は学生に保育参加させることはなく、あくまで親子で遊ぶひろばに徹するスタンスである。

「ぼっけ」において学生の保育参加は丸谷らの先行研究<sup>[8]</sup>にその成果が示されているが、この実践をどのような教育的枠組みで提供するかを課題としている。今回の調査研究で、上述の2大学から得られた成果を、もう少し時間をかけて委員会のメンバーから学部教員間で討議を重ねていきたいと考える。

### おわりに

再度、「親子のひろば」に親がいないで「保育士と子どもの場に学生が保育参加する」意義を考えてみるということであるが、「ぼっけ」の空間的利用という点のみ観れば、もし別の場所での保育が可能ならばどうなのであろうか、ということを検討してみるとよいかもしれない。しかし、学生が授業の合間に参加できるという点で、その場所は学内でありたい。現在の場所としては、「ぼっけ」が最適である。心理的な距離としても、学生にとっても親にとっても「ぼっけ」の親近感が安心をもたらす。

「ぼっけ」が多様性に富んだリソースを含んでいることをそれらが雑多に詰め込まれていることは教育的には構築されないが、コンセプト・マッピングすることで整理しつつ、保育養成の大学としての「ぼっけ」における学生の参加形態を展開していくことが肝要である。地図に迷わない指針となるのは、学部理念といえよう。

イメージは個人で異なるが、筆者は学部教育を一枚の布とたとえ、縦糸に学部理念のコン



セプトが張られていて、横糸にこども専門科目、人間総合科目および自由履修科目が織り込まれていき、専門的な知識理論を取得し、人間性豊かな幅広い教養を身につけていくというイメージを描いている。時には糸が絡み、ほどいたりすることもある。残念ながら糸を切ってしまうこともあるかもしれない。その他に学生個々にさまざまな材質や色の糸を選び、その個人の1枚の布をデザインしていくというものである。それらはタペストリーのような物語性があるかもしれない。

そして、今、「ほっけ」と1号館1階のフロアや廊下そのものが、実は「ひろば」なのだという実感を得ている。「ほっけ」という1つのコミュニティはその周辺コミュニティの一部である。学生も親も学内において「ほっけ」コミュニティからの分離や融合また離散する繰り返しのなかで、ともに「育つ」ことを体験していく。学生の保育参加は、専門スタッフのサポートがあればこそ成り立つ。親プログラムの選定やどのように位置づけていくかはまだ検討の余地があるが、学内の構造的なプログラムでの時間、場所と人が限定された条件下で、子どもと学生の密接な関わりと親との3者が育ち合うことは非常に意義深いものと期待される。

## 謝辞

本研究調査にご協力をいただいた相模女子大学・人間社会学部教授の尾崎康子先生と他2名の先生方、東京都市大学・人間科学部教授の小川清美先生には、貴重な資料や情報を提供していただき厚く御礼申し上げます。特に小川清美先生には、本学まで出向いて学部教員へのご講義をくださったこと、大変有難く存じます。なお、本研究は2013年度特定研助成により、調査研究の成果をあげることができました。学園関係諸氏、大学教職員の各位に心よりお礼を申し上げます。

## 引用文献

- [1] 新村出, 「広辞苑」, 岩波書店, 東京, p1842, 1968年
- [2] 櫃田紋子, 浦和大学・浦和短期大学部「浦和論叢」第38号, p51, 2008年
- [3] 福沢諭吉, 学問のすゝめ, 福沢諭吉選集, p24, p27, p44-45, p212  
慶応義塾大学百四十年三田会, 東京, 1973年 非売品
- [4] 大久保秀子, 浦和大学・浦和短期大学部「浦和論叢」第38号, p7, p21, 2008年
- [5] 東京都市大学『人間科学部児童学科』学科案内パンフレットより
- [6] 東横学園女子短期大学「子育て支援センターぴっぴ」運営委員会『子育て支援センターぴっぴ  
ー経過と課題ー』, p2, 2010年
- [7] 土持ゲーリー法一(東北大学高等教育開発推進センター編), 東北大学出版, 仙台, p63, p89,  
2009年
- [8] 丸谷充子, 市川美恵子他 浦和大学・浦和短期大学部「浦和論叢」第48号, 2013年

## 参考文献

1. 伊藤貞夫, 古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退, 講談社, 東京, 2008年
2. 小川清美他, 学内の子育て支援センター「ぴっぴ」の効果的活用, 実践力のある保育者養成実現の教育プログラム, 東横学園女子短期大学保育学科, 東京, 2008年
3. 東京都市大学公式サイト <http://www.tc.tcu.ac.jp/pippi/open.html>  
2013年9月23日検索
4. 白梅子育て広場ホームページ [http://shiraume.ac.jp/hp\\_kosodate/bottom.html](http://shiraume.ac.jp/hp_kosodate/bottom.html)  
2013年12月10日検索
5. 埼玉大学公式サイト <http://www.saitama-u.ac.jp/education/cultivation.html>  
2013年7月29日検索
6. 関東学院親と子のひろばホームページ <http://www.olivehiroba.com/>  
2013年8月7日検索
7. 星美学園短期大学子育て支援室ピーノのへやホームページ <http://www.seibi.ac.jp/college/room/>  
2013年9月23日検索
8. 慶応義塾大学ワークバランス研究センター (2011年3月終了)  
「ソーシャルキャピタルを育む女性研究者支援」シンポジウムホームページ  
<http://www.wlb.keio.ac.jp/project/symposium/>

## Summary

Growth of Students and Parents in Drop in-Center, 'Pokke'

— Significance of Students of Child Department Participating in Childcare —

○Yoko Sugano      ○Yuko Igarashi      ○Mitsuko Maruya  
Hideko Okubo      Mika Funaki      Takahiro Shibata

Efforts for student education through 'Pokke' ('Pokke' henceforth) which is a Drop in-center at the Child Department of Urawa University, reached their 7th year in April, 2013. There has already been continuous buildup such as 'Understanding and observing children' classes, free participation in 'Pokke' and implementation of internships. Furthermore, previous research showed that it was useful for students to have childcare experience in the Nobody's Perfect (NP henceforth) course and 'My Own Time - a time when children can play with older people', and that parents and children also had an opportunity to learn through these experiences.

This time we will deepen our review of the educational significance of our 'Pokke' efforts on the basis of these results. For this purpose, we investigated the use of Drop in-center at other universities, visited two of them, and interviewed staff running them. In this paper, we discuss what our students can expect in development of students, parents and children through 'Pokke', mainly on the basis of the reports of this study.

**Keywords** Drop in-Center at the University, Student Education, Growth of Students and Parents

(2014年6月19日受領)